

端之追分

「こつち空いてるよ」

幸か不幸か、同期の卓が定員オーバーとなつてしまった私は、離れ小島に流れ着いた。忘年会ということなので、普段よく話す同期といても勿体ないみたいなどころはある。幸つてことで良いかな。

「では、失礼して……」

島にいたのは先輩二人。顔だけなら何度か見たことあるけど、名前までは覚えていない。まあ、まだ上京してからせいぜい半年ちよいなので、それが普通……なんじやないかと、思いたい。高校の時とはうって変わつて、何十人という人の名前を覚えなさいいけないのは、なかなか慣れない。

「お疲れ様です。椎葉しいばと言います、文学部です。一年の卓が埋まつちやつたので、こつちにお邪魔します……」

こういう場面でも普通に挨拶するのが普通なのかな。忘年会というか、こういう集まり自体初めてなのでよくわからない。そう考えている間に口は動いてしまつたので、早くも後の祭りなんだけど。

「あれ、四人卓二つで足りなかつたかあ、ごめんね」

「俺ちよつと確認してくるわ」

そういつて男の先輩のほうは早々に席を立つていつてしまつた。

「あ、新入生なら私のことわからないか。川村つて言います、同じ文学部だけど、学科どこ？」

「私は史学です」

「おつ、珍しい。私も同じじ」

偶然ながら、自分と同じ学部学科の先輩と同卓できた。史学科自体、そこまでたくさんはいないはずなので、互いにレアキャラ扱い。後で履修やゼミのことでも聞いて

みようかな。

「じゃあ、とりあえず飲み物だけ頼んじやおうか」

「あ、あの〜アルコール飲めないんですけど、大丈夫ですかね……」

「え？ 一年生だから未成年でしょ？ 普通にソフトリあるから、そつち頼みなよ」

「あ、そうなんですわね〜」

未成年だろうが、こういう場ではアルコールを飲まされるのではないかと覚悟を決めて来てた（ソースはネット！）ので、少し安心。

社会に都会に、飲み会。私はこれから、未知の世界に飛び込んでいくのである。……秋になつてからのサークルデビューつて、手遅れじゃないと良いんだけど。

\* \* \*

「お疲れ様でした〜」

忘年会シーズンを少しフライングしての忘年会が開かれたのは、おそらく幹事長等の運営チームの大半が地方勢だからだと思う。東京の大学なんですけどね、ウチ。

「じゃあまた来年〜」

「良いお年を！」

「初詣行かない？」

まだ大学はもう二週間くらいはあるはずだが、忘年会をやつてしまったものなので完全に年末ムードになつてゐる。まあ、久しぶりの飲みなのだ。楽しいことだけ考えたい時もあるよね〜、つて思うところはある。

「川村もどう？」

私にも初詣のお誘いが来た。

「あ〜、どうしようかな」

飲み会のノリで決めたことで良い思いをしたことがないので、なんとなく躊躇する。いや、別に行きたくないわけではないのだが……。

「は〜い。じゃあ、とりあえずこの辺で解散ということだ」

終わりそうにない無秩序な年末トークに危機感を持ったのか、少し強引な幹事の締めが入って解散となった。これを丁度良い口実に、私は駅に向かった。

……が、やらかした。終電を逃した。楽しいことだけ考えていた罰だろうか。明日は普通に授業がある。しかもよりにもよって一番眠くなる三四限、とてもまずい。

「終電逃しました」

終電、逃しちゃったね……なんて言葉は当然出ない。

もう少し早く気づいていれば、何人か当てる友人に泊めてもらえたかなあ、もう遅いんですけど。グループに送ったメッセージには憐れみのリアクションが連なるばかり。同情するなら宿をくれ〜。そう思っていた矢先「私も逃しました……」

とメッセージが。送り主は「あお」……誰だろう。たまたまともな活動があるくらいの緩いサークルなので忘れがちだが、一応ここは創作サークル。表示名をHNにしている人も少なくない。とは言え、助け舟ほどではなくとも、似たような境遇の同志がいるとなると少しは安堵するといったもの。すかさず返信。

「北口出たあたりにいるんですけど、良かったら合流しませんか」

「わかりました〜向かいます」

すんなり快諾された。私は本名表記だから、誰かわかっているのだろう。少なくとも、あつちが私であること

をわかって来てくれるのなら、気まずくはならない。人数が多いサークルともなると、同じサークルなのに知り合いですらない人も割といるものなのだ。ありがたい。

五分ほどしてから、同志はやってきた。

「お疲れ様です川村先輩、さっきぶりですね」

「なんだ、椎葉ちゃんか、お疲れ〜」

同志は後輩であった。しかも、たまたま同席してた子。髪色は大人しそうな黒、それに眼鏡までかけているので文学部らしい。けど、見た目に反してよく喋る。

「初めてなんですよね、終電逃すの！」

あ、そういうタイプか。私も初めて終電を逃したときはこんな感じ……ではなかった。いや、明日普通に平日だよ？

「電車見るの忘れて逃しちゃった系？」

「酔いっづれた先輩を介護したら、あつ……って」

「あくそういう……。なんかごめんね……」

「全然気にしてないので大丈夫ですよ。それよりも、終電を逃してしまった事実にはワクワクしてます！」

真夜中の東京に何を期待するというのか、と思わずにはいられない。

「汚いし暗いし、飲み屋くらいしかやってないと思うけど……」

「私、出身がド田舎なので、終電がまだ明るい時間だったりしたんです、本当ですよ。なので、むしろ感動してるまであります」

「いや、そこ感動するのかなの？」

都会生まれ都会育ちの私には想像しがたいが、どうやら日付を跨いでも終電があることに軽く感動を覚えるくらいには、終電が恐ろしく早い土地があるそうだ。……

やっぱり感動するほどではないと思うんですけど。

「楽しいに越したことはないので、お気になさらず！」

「うーん、まあ、そういうことで良いのなら……」

私はまったく楽しくないんですけど！

「じゃあ、これからどうする？ このままじゃ寒いし、

なんとかしたいよね」

帰宅が困難となった今、一番はなんとしてもこの極寒のコンクリートジャングルから避難することだった。

「私寒さには強いですよ！ あ、良かったら手袋使いますか？」

「いやいやいや流石に……」

ド田舎というのは、雪国かどこかのことなのだろうか。北海道とか？

「飲み屋だとちよつと居づらい……よねえ。」

こういう時は、ネカフェをささつと見つけてしまうのがセオリーだと経験が囁く。が、近くの快活の空室は……なんと運の悪いことか、どこも満室。えつ、そんなことある？ そんな私たちに吹き付ける無慈悲な風。着こんでいても寒すぎる。

「寒い〜」

「とりあえず、歩いて少しでもあったまりませんか？」確かに、ずっと駅前に留まっているよりはマシだろう。

「じゃあ、歩きながら入れそうなところ探そっか」

「はい！ 行きましよう！」

無駄に元気があるように思うが、童顔なせい……いや、おかげで、憎めない後輩なのだ。

「うう、やはり寒い」

「やっぱり、手袋使います？」

「……有難く使わせていただこうかな」

強がりにはとても見えないので、お言葉に甘えさせて

もらうことにした。幸い、手のサイズは同じくらいだった。

深夜の東京と言っても、なかなか一括りにはし難い。今日はたまたま日本橋の近くだったので、比較的治安は良い。人気は、あんまりない。おかげで、新宿のような地獄のような悪臭や騒音もない。最初から散歩するつもりだったわけでもないが、コンディションは悪くないと言えるだろう。

「あつ、あれって歌舞伎座ですか？」

「多分そうじゃない？」

さつきから椎葉ちゃんの赴くままに歩いているものの、地図によればこちらの方角にあるのは快活ではなく、海だそう。神田のほうとかに行つたところで、大してあてはない。もう色々諦めて、後輩の東京見物に付き合うことにした。

「デカイビルだけでも結構びつくりしたんですけど、オサレな建物もあつて良いですね〜」

正直なところ、もう長くこういう街の中で生きてきた身からすれば、特に思うところはない。むしろ、長く過ごせば過ごすほど、道端のゲロや人混みの鬱陶しき、喧騒……挙げればキリがない嫌なところばかりが目に入るようになっていく。今日はそれがいいから、幸か不幸か椎葉ちゃんが知覚することはない。

「慣れたらどれも同じに見えるようになるんじゃないかな」

「そういうもんなんでしょうか……」

これは、何も私に限つた話ではないんじゃないだろうか。付き合いが長くなるほど、長所よりも短所ばかりが気になってしまふ。昔は仲の良かったはずの父母が、最近で

はまるで会話がなくなることが、頭をよぎつた。

大学の話や適当な雑談をしながら、気づけばとうに日本橋を離れてしまつていた。歩いているおかげか、寒さはそこまで気にならなくなつてきたので、結果的に正解だったのかも知れない。

「大分歩いてるね」

「なんか付き合つてもらつてみたいで、申し訳ないです……」

「いや〜全然いいよ。どうせ始発まで暇だから」

「築地がやつてる時間だったら、ちょうど良い暇つぶしになつたかもしれないですね……」

「築地は私も行ったことないけど、流石にこの時間だと何も食べる気しないなあ……」

沈黙の築地を素通りして、勝鬨橋を渡る。ビル街の東京を抜けて、臨海部に入っていく。

「おく、ここからだぞザ・都会つて感じの景色で、ビル街の中にいる時とはまた違つて良いですね〜」

椎葉ちゃんは都会全肯定botなんだろうか、なんて思いつつも、私も後ろを振り返つてみる。確かに、いつもの嫌な東京の雰囲気とは、大分違つて見える。騙されてはいけないとはわかつている。それでも、こう街の外から東京を眺めるような経験はなかつたので、ちよつと新鮮。

「そうだね、綺麗」

深夜の静けさも相まつて、少しだけ東京の良さ？ 的なものを理解できたような気がした。なるほど、外から見た東京は綺麗に写つてしまうのか。ゴミやゲロは捨象される、都合の悪いものは写されない。

「ただ、夜景だったら多分真夜中よりも光のある時間帯

のほうが良いかもね」

「それは間違いないですね……残念……」

そこまで悔しがらなくてもないと思つてしまう辺り、やっぱりこの全肯定botには敵わないのだろう。私は、botにはなれない。

更に進んでいく。疲れないのかな。まあ、足を止めたら、それはそれで寒さで動けなくなりそうだから、そのほうがありがたい。

「この辺ともなると、いよいよ人が本当にいないですね」

「流石にこの辺じゃあねえ」

「でも、一番行つてみたかったのは、ここなんです」

そう言つて立ち止まつた前には、広大な公園があるのみ。え、ここ？

「多分あつてると思うんですけど……あ、ほら」

そう言つて椎葉ちゃんは公園の端にあるモニユメントを指さす。ああ、そういう。

「ここ、ビッグサイトの跡地なんだね」

行つたことある癖に、すぐにピンとこないくらいには跡形もない。かつての建物を模したモニユメントがあつて初めて思い出した。

「先輩は来たことありますか？ コミケとかで」

「高校の時に友達に連れられて来たことはあつたけど、それ以外はなかなあ」

真夏の晴天下、異常な暑さと悪臭が最悪で、友達には悪いが二度と行かなくて良いと思つた記憶がある。だが、その年の秋の大雨で建物がダメージを受けて、冬は中止結局、防災上のリスクから再建されることなく、あっさりビッグサイトは歴史を閉ざした。奇しくも、私はビッグサイト最後のコミケに立ち会つていたということに

なる。だからなんだって思うけど。

「羨ましいです。私も高校の頃、友達何人かで泊まり込みで行ってみよう的な話に誘われたんですけど、私は講習で行けなくて……」

「暑いし臭いしで散々だったから、私からすれば来なくて正解だったと思うけど。新刊とかも、今なら通販あるんだし」

「わかるんですけど、それでも行つとけばよかったなうって思うんです。こう、なんというか、後悔すらすることなく、結局取り返しのつかないことになっちゃった感じがして」

ひよっとしたらその友達軍団からの報告で美化しすぎているのかもしれないが、やらずに後悔するくらいならやって後悔するほうがマシ、というのは一理ある。

「元々、大学も地元のところに行くつもりだったんですけども、大学進学でも後になってから東京に出ておけばよかったり、なんてことにはなりたくなくて……」

「しつかりしてるなあ」

そんな大志はいざ知らず、偏差値的に行けそうなどこを適当に受けた私とは大違いである。

「終電を逃すのだって、こうやって街歩きするのだって、明日になって疲労と眠気で後悔するとしても、やれるんだったら一回くらいはやっておきたいなうって」

「なるほどね」

終電も東京もコミケも経験した身からすれば「やめとけ」って言いたくなる。けど、そもそも経験すらない人からすれば贅沢な話なのだろう。まあ、やってしまったが故に取り返しのつかない後悔をすることもあるとも思いうけど、野暮だよな。

「ビッグサイトも、手遅れかもしれないんですけど、ま

だ後悔が胸の内に残ってる内に跡地で良いので訪れたかった、というわけです。なんか、ちよつと湿っぽい話になっちゃってごめんさい」

「ううん、気にしてないから全然平気平気」

お互い深夜テンションというやつだろうか、まあこういう話で盛り上がることもあるのだ。可愛げのある割に自身はしつかりしているじゃないか。稀少な史学徒仲間が面白い子だとわかっただけでも、良い収穫なんです。

「話は変わるけど、さてここからどうしよう。とりあえず、引き返す？」

「あ、実はもう一か所だけ行ってみたいんですけど……。流石にこれ以上は申し訳ないので、やめときます」

「いやいや、もう一か所くらい変わらないし、遠慮しなくていいよ」

もうそろそろ3時になるうとしてている。それに、こんな話を聞いた後だと断るのも気の毒だ。ここまで来てしまった以上は、最後まで付き合いたくなってしまおうというもの。さあ、どんとこい！

「え！ じゃあ、レインボーブリッジを徒歩で渡ってみたいんですけど、ここからだどのくらいなんですかね調べてみます！」

「ん〜〜!？」

レインボーブリッジ!? だが、こつちが振ってしまつた以上、諫めるにも気が引ける。どこにそんな体力が残っているのやら……。

結局、調べてすぐに深夜には渡れないという事実が判明して難を逃れることができたが、もし何かの間違ひで入れてしまったら、追加で約5kmの徒歩となつていたところだった。危機一髪。

やらずに後悔、というのも嫌な話だが、自分が良かれ

と思つて言ってしまったことで大変なことになるのも、それはそれで地獄を見るものだ。椎葉ちゃんにはこうはならないで欲しいところだが、隣の芝生は青く見えるというやつなのだろうか。地獄を見ないと、地獄が何たるかはわからない。

人生つて、難しい。

\* \* \*

濃い一日。我儘に付き合ってくれた川村先輩には頭が上がないけど、改めて上京してきて良かったって確信した。飲み会は、ワイワイ騒いで楽しい。大きな街は、やっぱり凄い。ビッグサイト、あんなところにあつたんだ。明日の授業は爆睡コースだけど、そんなことはどうだって良い。

ただ、ちよつとだけ気がかりなことがある。いつも見てるからつて言つてはいたけど、川村先輩はあんまり東京をそこまで良い場所だと思つていないんじゃないかって。ビッグサイトも同じく。別に、露骨に嫌悪感を示していたわけでもないけど、少しか自分の寄せている期待が怖くなった。もしかしたら、自分が思っているほどのものは、そこにはないんじゃないか。

……でも、やはり地元を思い出してみれば、やっぱり都会に期待する他ない。立て続けに近くの市が財政破綻の二例目、三例目となつた。母校は廃校、列車やバスはまともに使えたもんじゃない。私には、もう未知の世界に飛び込んでいくしかない。先輩は、もしかしたら東京の外がどんな世界なのか、知らないのかもしれない。人生つて、難しい。